卓　球　と　私 (※1)

･･･ 思 い 出 の 一 戦 ･･･

高普第 14 回卒　伏 見　利 博 (※2)

思い出の舞台は、昭和 36 年春の福島県総合体育大会、会場は磐高の体育館である。
昭和 34 年のこの大会では、相高の四天王と呼ばれた先輩諸氏が県下で３種目に完全優勝（団体戦、シングルス、ダブルスの上位を全て独占）という偉業を成し遂げている。

翌昭和 35 年は、３年生が卓球部におらず我々２年生が出場し、団体戦は磐高に敗れたものの、シングルスとダブルスに優勝することができたので、３年生となった今大会は、３種目制覇を目指して臨んだ大会であった。

団体戦の当面のライバルは磐高であったが磐高も同じ思いであり、学内報に相高を倒さずして優勝はあり得ずとの決意文が載っていたと記憶している。
また、磐高は大会前に合宿を行い、秘密兵器としてループドライブ（ボールを上に擦りあげ強烈な上回転を与える打法で、福島県の高校生として初めて試合で使用した）をマスターしてきた。
現在はポピュラー化されたループドライブも当時は返球が難しく苦戦を強いられた最大の原因となった。

くしくも、組合せの関係で準決勝で対戦することになったが、地元開催でもあり、前評判の効果もあってか、この対戦時は応援団を筆頭に磐高の生徒で会場が満員に膨れ上がりムードも最高潮に達したところで試合が開始された。
団体戦は、ダブルスを間に挟んで３ゲーム先取した方が勝者になり得る。シングルスは１対１、ダブルスはフルセットの末どうにか振り切って相高が２対１とリードをした。

４番手は双方エース同士の対戦となった。ほとんどの観衆は相手の応援で私は敵役であったが、相高卓球部の主将として、また、エースとしての責任とプライドが私を奮い起たせた。
試合は、ループドライブにてこずり１セット目は先取されたが、２セット目は取り返してセットオールとなり、３セット目は一進一退のシーソーゲームとなった。

対戦している本人でさえ、どちらが勝つか全く予想もつかない試合展開となり、観衆の声援もすごく、若かった私にとって相当なプレッシャーとなったことも事実である。
３セット目のスコアも 20 対 20 のジュースとなり、最後は勝利の女神が私に微笑んでくれたが、両者の健闘にしばらく拍手が鳴りやまなかったことを覚えている。

やがて、試合後の挨拶を終え、もみくちゃにされながら控室に戻りかけた時「いい試合でした、興奮しました、感動をありがとう」と言って私の手を強く握りしめて離さない人がいた。
その人は、たった今、対戦した相手の兄であることを名乗り「お互い精一杯戦ったのだから弟も悔いはないと思う」と言ってくれた。私は卓球がこんなに人に感動を与えることができるスポーツであることを初めて教えられ、いつしか手を握り返していた。

この大会では、団体戦とシングルスに優勝しダブルスは決勝戦で敗れ３種目優勝という目標は達成できなかったが、持てる力を出しきった結果であり満足している。
もし、この一戦に負けていたら一種目も勝てなかったのではと思えるほど、忘れられない貴重な思い出に残る勝利であった。

卓球と縁が切れず 35 年有余、先輩・後輩とは勿論のこと、当時、白球を追いかけ汗を流し合った他校のライバルたちとの付き合いが未だに続いており、これが私の大切な財産となっている。

（※１）「相中相高百年史」1998（平成 10）年 7 月 6 日発行より。
（※２） 昭和 37（1962）年卒、中村出身。

（ 転記&※脚注　村山 ）